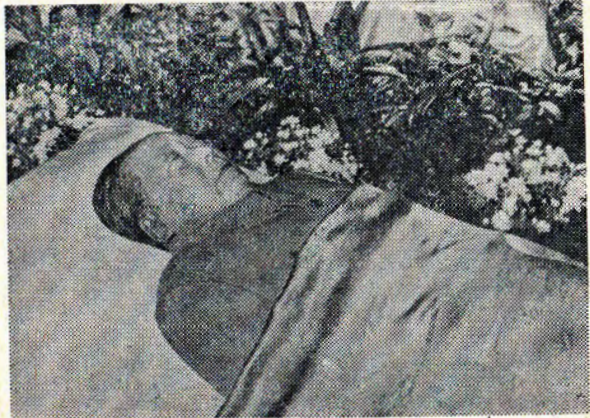


毛沢東時代への訣別



なか じま みね
中島嶺雄 お
(東京外国語大学助教授・現代中国学)

訃報に接して

たまたま国外にあった私が、毛沢東死去の報に接して直感的に思ったことは、次の二つのことであった。その一つは、その日つまり九月九日が中国では菊の節句の重陽節であり、「九」は「久」につながり、それが二つの重なる(「重陽」を「重九」とも書く)縁起のいい日であって、だから中国人は古来、九九という数字が好きで、たとえば香港の租借期限も九九年だというのに、この日の毛沢東の死は、あまりにも時期が悪いと思ったこ

とであった。二つは、毛沢東は生前、はたして遺書ないしは遺囑を残したのだろうか、ということであった。まず、その辺の私の感想から述べてみたい。

毛沢東逝去の時期にかんじていえば、いかに偉大な指導者であろうとも、天命はいかんともしがたいのであるが、去る一月の周恩来の死以来、七月の朱徳の死をはさんで、本年はついに周・朱・毛と中国革命の三巨人が相次いで逝ってしまったことになる。この間、「走資派」批判、天安門事件、河北大地震と激動が続き、中国民衆の心理的動揺がきわ

毛沢東時代への訣別

めて大きかった直後の毛沢東の死ということになった。しかも、七月下旬の河北大地震は、「人が天に勝つ」ことを教えられ、「戦争に備え、災害に備え、人民のために」とのスローガンで鍛えられてきたはずの中国社会に大きな地震バニックを巻き起こし、その被災状況さえ一切公表し得ないほどの損害をもたらしたのみならず、中国民衆に「毛沢東思想」の有効性への深い疑念をかきたてたばかりであった。異例の外国人退去勧告なども、このような中国社会内部の亀裂を外部世界にさらけだしたくないためであったろうし、たとえば中国当局が、ソ連の原爆攻撃にも耐えると誇示して外国要人には必ず見せていた北京の地下壕なども、河北大地震以後、そこを案内された外賓はないはずである。もとより、すでに報せられたように、「抗震救災」活動における華国鋒首相の役割りや人民解放軍の活動ぶりには注目すべきものがあった。だが同時に、今回の河北大地震を通じて中国民衆が気づいた大きな問題点は、いまこそ、亡き周恩来首相が提起し、失脚した鄧小平副首相が推進しようとした「四つの現代化」(農業、工業、国防、科学技術の現代化)が急

務であるということではなかったか。にもかかわらず、たとえば『人民日報』の短評「奇跡的な出来事」(八月九日付)は、再び「共産党の指導のもとでは、人間さえいれば、この世のどんな奇跡でもつくりだすことができる」との毛沢東の言葉(「観念論的歴史観の破産」)を引用して、毛沢東神話への回帰をしきりに促していたのである。

まるで王朝末期の混乱

このような状況のなかで、ついに二、三カ月まえには、あの驚天動地の天安門事件に際し、中国はもはや秦の始皇帝の封建時代ではない」と切々に訴えた民衆の叫びが、鄧小平批判へと論点をすりかえられて抑えられ、以後、中国国内には一種の「しらけムード」がただよび、そうした政治不信の雰囲気の中で、ソ連大使館爆破事件をはじめとする不穏な政治が表面化したのと同様に、この八月中旬以降は、各地に王朝末期の混乱期にも似た社会現象が頻々と発生していたのである。それだけに、党中央は、すでに鄧小平は政治的に失脚したにもかかわらず、これらの不穏な情勢を「走資派」の「陰謀」だとして批鄧運動を

とくに八月中旬以降強化しはじめていた。たしかに『人民日報』を注意深く読んでみると、数多くの社会的退行現象が批判の題材として報告されており、これらの事象については、たとえば『ニューズ・ウィーク』の最近号が、上海の南方三七〇キロの町で銀行強盗があったとの地方新聞の報道を伝え、さらに中国民衆のあいだではこのところ無断欠勤、交通違反、暴行殺人、コソ泥、汚職、売春などこれまで考えられないような事件が頻発していることを報じたのであった。こうした雰囲気の中、中国民衆のあいだには、各種の流言蜚語や街頭消息が飛び交い、文化大革命の発動以来十年目にして人びとは、この年がなにか凶兆の年であるかのように感じはじめていた。また、八月の青島署名論文(鄧小平批判を通じて団結を強化しよう)、『紅旗』第八号)が示唆していたように、ちょうど十年まえ、紅衛兵として北京の街頭に進出した今日の下放知識青年たちは、いまや天安門事件を支えた「反革命分子」に成長していたのであった。このような時期の中国を次に襲ったのは、一時は中国当局が予測した大地震の再来ではなくして、毛主席その人の死であったの

である。つまり、この時期の毛沢東の死は、ついに最後の事態が到来したことの確認ではあっても、決してすべての中国民衆が穏やかにその死を葬送し得るほどの心の準備もない状況において、現実のものとなったことになる。

ところで、毛沢東の死そのものについては、とくに去る六月十五日に外国要人との会見が中止される旨、国内にはふせたまま外国にたいしてのみそのことが知らされて以来、外部世界ではそれを近い将来のこととして予期していたものである。新華社が世界の報道機関に毛沢東の近影を配信したことも、中国当局の一つの配慮であったように思われる。

また、去る五月十六日に文化大革命の「五・一六『通知』」十周年を記念して久々に出された『人民日報』、『红旗』、『解放軍報』編集部の三紙誌共同社説「文化大革命は永遠に光を放つ」以来、「新陳代謝は宇宙における普遍的な、永遠にさからうことのできない法則である」との毛沢東『矛盾論』の一節がしきりに引用されはじめ、最近の畢盛署名論文「プロレタリア階級は革命的樂觀主義者である」(『红旗』第八号)もこの一節の重要性を

強調したばかりであった。やはり、中国当局は、毛沢東の死にそなえていたのであろう。

だが同時に一方で、中国当局が毛沢東の健康を誇示していたことも事実である。八月三日夜、中国外務省報道局のスポークスマンは、毛主席は北京での強い地震発生の可能性にもかかわらず依然として北京にとどまっていると声明するとともに、毛主席の健康悪化説を強く否定していた。八月中旬に一時帰国したわが国の小川駐中国大使が、帰国前、中国外務省の韓念竜次官から毛主席はすこぶる健康である旨を伝えられ、そのことを帰国後の記者会見で語った印象はまだ鮮明であった。だとすれば、一つの教訓として、やはり中国情勢を的確に把握するには、中国側の動きを十分に見きわめ、中国の公式文献を丹念に読み込むことこそ必要であり、中国外務省筋の発言は、それらをつねに逆説的に解釈すればよいということになるであろうか。

遺書・遺囑はあるのか

毛沢東の死と同時に発表された「全党全軍全国各族人民に告ぐる書」は、「われわれは必ず毛主席の遺志を受け継ぎ……」との言葉

がさまざまな問題を投げかけてきたことも忘れることはできない。周知のように、中国革命の父といわれた孫文は、「革命いまだ成らず」の名句で知られた遺囑を汪精衛に口授したばかりか、ソ同盟に宛てた遺書と宋慶齡夫人に宛てた私的な遺書とを世に残した。これらの遺訓によって「連ソ・容共・扶助工農」の新三民主義に基づく国共合作は進んだが、同時に、国民党内部の左右の対立を激化させ、右派は、当時、国民党左派として容共的だった汪精衛が遺囑を改竄したのではないかと疑い、また、ソ同盟宛の遺言は、同じく容共的だった孫文の秘書の陳友仁がコミンテルン顧問のポロジンとともに起草したものであって、孫文自身の意志ではないと主張した。いずれにせよ、遺書や遺囑の解釈をめぐる国民党内部の対立抗争はさらに激化したのであった。

昨年四月に死去した台湾の蒋介石総統にも遺囑があった。だが、この遺囑をめぐっても、まったく話題がなかったわけではない。そこには蒋介石の署名がなかったばかりか、宋美齡、蔣経國、蔣偉國らの署名の仕方がいかにも不自然に思われて、残された一族の復

雑な家庭の事情が反映しているのではないかと囁かれたものである。

去る一月に死去した周恩来にかんしては、すでに台湾筋の情報に基づいて報ぜられたように、北京、広州、武漢、昆明の四地方で周恩来遺囑なるものが流布されたとしてやはり話題を呼んだ。これらの周恩来遺囑の真偽についてはもとより定かではないが、中国の公式文献も、「周総理遺書」が中国内部で流布されたことを認め、それは鄧小平がまきちらした反革命的な、政治的デマ、だといわれている(紅宣「鄧小平の反革命輿論攻勢について」、『学習と批判』一九七六年第六号)。

江青夫人の不安

このように中国の指導者における遺書ないしは遺囑のもつ意味を考えたとき、毛沢東にかんしても、この問題を考慮すべきであろうことはいうまでもなからう。では、毛沢東の場合には果たしてどうであろうか。

もとより、今日、この問題については、まだなにも明らかにされていない。従って、あくまでも推論にたよる以外にはないのだが、よく知られているように毛沢東は一九七一年

をいくたびか繰り返している。九月十八日に挙行された追悼大会での華国鋒(党第一副主席兼首相)の弔辞も、毛沢東路線の継承を固く誓っていた。だが、すでに中国社会の内部には、とくに昨夏の杭州事件以来、今春の天安門事件を経て、毛沢東時代への訣別を待望する空気が流れていたことも否定しがたい(この点について詳しくは拙稿「天安門政変と『走資派』」、『朝日アジアレビュー』一九七六年夏号参照)。毛沢東存命中においてさえ、このような潮流が潜在していたのであるから、毛沢東亡き中国の将来は、やはりきわめて流動的かつ可変的だといわなければならないまい。

そのような展望のもとで、さしあたり重要な問題は毛沢東に遺書もしくは遺囑があるのか否かということであろう。なぜなら、いかに政治の変化に敏感な中国人社会においても、強大な指導者が残した遺書もしくは遺囑はきわめて大きな意味をもつというのも、中国人社会特有の「政治文化」だからである。

しかも、中国において、強大な指導者たちは、これまで遺書ないしは遺囑をつねに残してきたばかりか、これらの遺書ないしは遺囑

春、旧知の故エドガー・スノーにたいして、自分は「破れ傘をさして日差しをよろめき歩く孤独な道士」にすぎない、と語ったという。また、これはほとんど知られていない事実であるが、七三年四月に中国を訪れたメキシコのエチエベリア大統領にたいしては、ラテン・アメリカから初めて訪れた「第三世界」の友人という親近感からであろうか、権力者の孤独を切々と語るとともに、権力の集中がいかに重要であり、また困難であるかを諄々と説いたという。

もしも、このような毛沢東の境地在死に臨んでさらに深まっていたとすれば、毛沢東はあるいは遺書や遺囑を残さなかったかもしれない。その方が、いかにも毛沢東らしい最終期であるように思う。しかも毛沢東は、ごく最近、「百年後にまだ革命をやる必要があるか、いか? 千年後に革命をやる必要があるか、いか? やはり革命はやる必要があるのか? ……一万年以後に矛盾は見えなくなるのか、見えるはずである」といった最新指示を与え、いよいよ永遠の時間のなかに、彼自身の「継続革命」の想念を解き放ちつつあったのである。そして、これまでに毛沢東は、

夥しい数の語録や指示、著作集などを残してあり、とくに、これ以上の遺言などは必要ではなかったように思われる。そのうえ、いわゆる後継者問題にかんして、劉少奇、林彪と、この問題での相次ぐ失政のうちに、過般の天安門事件直後、急遽、華国鋒を「党第一副主席」という党規約にもないポストに就任させたことは、毛沢東の遺言に代わる措置であったような気もする。

だが一方、これまでの中国の「政治文化」からしても、当面の政治的必要からしても、やはりなんらかの遺言ないしは遺囑が存在するのではないかと考え得る根拠も十分に存在しよう。いうまでもなく、毛沢東は、その権力を担ってきたいわゆる上海グループを中心とする文革派の家父長体制という負の遺産を残しているのであり、これらの毛沢東側近にたいしては中国民衆からもきわめて鋭い批判が天安門事件ですでに露出していた。とくに江青夫人にたいする批判はきわめて根強いだけに、毛沢東自身、その将来にたいしては大きな不安をいだいていたであろう。

一方、江青夫人らの側近は、自己の将来にたいする苛立たしいまでの不可測性に直面す

るなかで、ついに毛沢東にたいして遺言ないしは遺囑を求めたとしても、これまた当然のことであろう。北京の中南海の奥邸にあって、毛沢東の最期をめぐり、どのような人間ドラマが展開されたのかは知る由もないのである。ともかく、もしも遺言ないしは遺囑の存在が認められるとしたら、当分はその方向において政治が動かざるを得ないであろう。だが、そこに新しい政治的摩擦が生じ、再び政治の亀裂が深まるならば、そのときには、遺言もしくは遺囑の真偽をめぐっても苛烈な党内闘争が展開されるかもしれない。

毛沢東の変転

先の「告ぐる書」は、毛沢東の革命的功績を列挙して、毛沢東が第一に、新民主主義革命の時期に「武力で政権を奪取」し、「農村根拠地を樹立し、農村によって都市を包囲し、最後に都市を奪取する道」を確立したと、第二には、社会主義革命の時期に「階級と階級闘争」がなお存在し、「ブルジョア階級はほかでもなく共産党内部にいるとの科学的論断を下し、プロレタリア階級独裁の下での継続革命の偉大な理論を提起」したこと、

そして第三には、国際共産主義運動中に「ソ連修正主義裏切り者集団を中心とする現代修正主義を批判する偉大な闘争を起こし、世界のプロレタリア革命事業と各国人民の反帝・反覇権主義の事業の盛んな発展を促進し、人類の歴史の前進を推進した」ことを大きくたえている。

だが以上の三つの主要な功績にかんして、えば、歴史的な評価が明らかに定まっているのは、第一点のみであって、第二、第三の問題については、国内的にも国際的にも、いまだ歴史的な決着はついていない。従って、これらの論点は、いずれも生々しい現実性のため、将来の中国を揺り動かしてゆかざるを得ないであろう。

そうしたなかで、「告ぐる書」は、「中国人民のすべての勝利はみな、毛主席の指導のもとに得られたものであり、すべて毛沢東思想の偉大な勝利である」とまで述べている。だが、このような全面肯定、全面礼讃は、その逆説的解釈をも同時に可能にする危険な言葉であるような気がする。そこまで穿たずとも、毛沢東の病状悪化という事態に臨んで十分に推誠を重ねて書かれたと思われる「告ぐる書」

のこの表現は、「毛沢東主席は中国共産党、中国人民解放軍、中華人民共和国の創立者であり」という華国鋒の弔辞の一節とともに、

すべてを毛沢東一人の功績に帰そうとするあまり、将来の歴史的評価に耐え得るものかどうかという不安をもたらす。少なくとも、中国共産党の創立にかんして、毛沢東は十三名の創立大会出席者（十二名説もある）のうちではきわめて重要な役割りを演じなかったメンバーであり、人民解放軍の創立にかんして、毛沢東の功績はやはり朱徳の名とともにたたえられるべきであろう。

このような毛沢東の歴史的足跡にかんして、とりあえず指摘すべきことは、毛沢東の輝かしい功績をたたえた数多くの伝記が、ほとんど二〇年代中頃の数年間をほぼ空白にしていることであろう。

毛沢東は一九二三年六月、広州で開かれた中国共産党第三回大会で中央委員に選ばれたのち、同年七月から八月にかけて、当時の党機関誌『嚮導』週報に「北京政変と商人」、「省憲法」と趙恒惕、「紙煙税」の三論文を相次いで発表しているが、これらはきわめて「右寄り」の論文であり、「北京政変と商人」

では「国民革命の指導勢力は商人であるべきだ」との主張さえ展開している。

翌二四年一月には国民党第一回大会に出席して国共合作へと改組された国民党の候補執行委員となり、三月には国民党中央で宣伝部書記となった。二六年一月には国民党第二回大会で中央宣伝部長代理（部長は汪精衛）、国民党機関紙『政治週報』編集責任者、同三月には国民党の機関である広州の全国農民運動講習所長になるなど、この間の毛沢東はいかに国共合作下であるとはいえず、もっぱら国民党内できわめて重要な地位に就いていたのである。

中国共産党内では翌二七年四月の第五回大会で中央委員にも選ばれなかったほどの「右翼日和見主義」に陥っていたとの見方が可能なのである。現に、当時の中国共産党中央宣伝部長のちに党を除名されて国外追放をよぎなくされた彭述之は、毛沢東の表向きの記事におけるこの空白期を問題にして激しい毛沢東批判をおこなっている。

失脚者たちの積年の怨念

彭述之は、陳独秀とともに「トロツキス

ト」として党を追われた現存の指導者であるが、それにしても、今回の「告ぐる書」は、「毛主席はわが党を指導して党内の右と『左』の日和見主義路線と、長期にわたる先鋭で複雑な闘争を進めた」として、陳独秀、瞿秋白、李立三、羅章竜、王明、張国燾、高崗、饒漱石、彭德懷、劉少奇、林彪、鄧小平と実に十二名のそれぞれの時期の党内闘争のライヴァルを挙げている。これらはそれぞれの時期の党内闘争・路線闘争のリーダーであって、これらリーダーとともにさらに数多くの追随者が失墜しているから、毛沢東はその生涯において実に数多くの同志たちを失脚させ、あるいは高崗や林彪のように死にいたらしめたことであろうか。

中国共産党は一九四九年の中華人民共和国建国以来今日にいたる二十七年間のうちに、わずかに三回しか党大会を開いていない。すなわち、いよいよ本格的な国内建設に着手した一九五六年の八全大会、文化大革命に一期を画し、毛・林体制の確立を誇った一九六九年の九全大会および林彪異変ののちの批林大会ともなった一九七三年の十全大会である。いま、これら三期の大会の中央委員・同候補

を見てみると、八全大会の中央委員・同候補合計一九三名のうち文化大革命後の九全大会では実に一一六名も失脚しており、彼らはいずれも劉少奇、鄧小平につながる実権派として失墜していったのであった。次の十全大会では、同じく九全大会の中央委員・同候補合計二七九名のうち一〇名の死亡者を除いて六三名が再び失墜していった。このように見てくると、建国に際し、毛沢東とともに天安門広場に集まったリーダーたちのうち、今日まで健在である者はきわめて数少なく、ましてや中国革命の段階から見えてくると、党幹部のうちでは毛沢東政治の犠牲者の方が圧倒的に多く、最後まで残った同志は、寥々たるものすぎないといえよう。

あらゆる意味で毛沢東をつねに補佐してきた政治秘書兼ブレインの陳伯達、文化大革命の奪権闘争に軍を全面的に投入して毛沢東を支えた林彪の末路は、とくに悲劇的であった。それはたんに「一将功成りて万骨枯る」式の日本の心情でははかり得ない酷烈な政治的現実であろう。それだけに毛沢東政治にたいする積年の怨念が、毛沢東亡きあと、江青夫人をはじめとする残された側近者にたいして向

けられないという保障もまたないように思われる。

上海・黄安グループの抗争

華国鋒は、その弔辞において、悲しみを力に変え、毛主席によって残された事業を執行すべきことを述べたところで、「マルクス主義をやるのであって修正主義をやるのではなく、団結するのであって分裂するのではなく、公明正大であって陰謀術策はやらない」と毛沢東の言葉を引用していた。この言葉には、まさに華国鋒自身の願いがこめられているように思われる。

だが同時に、華国鋒がやがて党主席として、三千万の党員、三百万の人民解放軍、八億五千万の民衆をゆるぎなく指導してゆけるという展望はまだ定かでない。当面、華国鋒としては、政治的な緊張度の強い文革派から一定の距離を保ち、いわゆる実務派と文革派とのバランスとしての立場において自己の地位を強化するように思われる。この場合、華国鋒が公安部長であることはきわめて有利な条件の一つであるが、同時に今日中国に存在するもう一つの民族的地縁集団とし

ての黄安グループとの提携を深めてゆくであろう。

すなわち、今日の中国の軍首脳のみならず、もっとも有力な実力派司令官たる陳錫聯（北京軍区司令）、許世友（広州軍区司令）、李德生（瀋陽軍区司令）の三司令は、政治局内部の実務派の重鎮・李先念とともにいづれも湖北省黄安県（県は日本の郡程度の大きさ）の出身なのであって、先の上海グループといい、黄安グループといい、中国政治の内面に存在する閉鎖的な閥族性（Zepolism）の根強さを改めて思い知らされるが、これは一つの政治的現実であって、今後の中国では上海グループ（文革派）対黄安グループ（実務派・軍）の抗争が政治の基本構造になる可能性も秘められているのである。

後者のグループは、当然、「四つの現代化」を推進するであろうし、その点ではいわゆる「走資派」や旧実権派との連携も考えられないわけではない。鄧小平の再復活も可能性としては当然考慮されねばなるまい。それだけに、今日でも鄧小平批判は厳しく、連日、批鄧運動が繰り返されている。鄧小平は経済建設をすすめ、四つの現代化をおこなうには、中国人で

はだめであり、社会主義制度も別に靈驗あらたかではなく、『外国の技術設備を導入して』、

『工業の技術改造をはやめ、労働生産性を高める』以外にない、と考えていた。そこで、鄧小平は『大政策』なるものを打ち出し、外国と『長期の契約を結び』、外国の資本家に『最新、最良の設備』を提供させ、わが国で生産する鉱産物で『償還』すればよいと主張した。これは掛値なしの外国崇拜、外国追従、投降売国の『大政策』である（高路・常才『鄧小平の買弁ブルジョア経済思想を評す』、『紅旗』一九七六年第七号）といった批判が連日展開されているゆえんである。

このような批判は、中国の対外貿易そのものを否定せざるを得ないような性質のものであるが、当面は、「毛沢東思想」への忠誠競争とその正統的な解釈競争が激化するであろうだけに、中国の対外姿勢はいきおい原則論的になるであろう。だがそこに行き詰まりが訪れることは明らかであろうから、リーダーシップの原則を揺がす外圧・内圧が増幅するであろう。この点でも後継体制は揺れ動くものと思われる。

ゲームはすでに始まった

おそらくソ連は、毛沢東の死の一つの新しい時代への決定的幕開けとみなし、さまざまなかたちで中国へ働きかけるであろう。この点でも中国は、たとえばソ連・東欧諸国の党から送られてきた電報を送り返していることにも明らかのように、ここ当分はきわめて原則論的かつ「左翼小児病」的な対応をするものと思われる。しかし、ソ連はそれに懲りずになおいくたびか働きかけるであろう。軍内部には、文革派への深い不満とソ連への一定の評価があるソ連側は見ているだけに、ソ連は逆に「持久戦」戦法に出るのではなからうか。現にソ連は毛沢東死去後に一切の中国批判をつつしはじめしており、この点でも毛以後の中ソ改善に大きな夢をつないでいる。

もとより、中ソが一枚岩の友好時代へ立戻れるものとはソ連側も考えていないが、中ソ関係の変化は、アメリカにとつての最大の悪夢であるだけにアメリカは中国がソ連と振り戻すことのないよう、これまた中国に大いに働きかけるであろう。この点で、中国がアメリカきつての反ソ主義者シュレジンジャー

前国防長官を手厚く遇しているのはやはり注目値する。

こうして、中国をめぐる国際政治の新しいゲームはすでに始まっているといえよう。毛沢東の死はたんに中国内部に毛沢東時代の終焉をもたらすばかりか、やがて毛沢東時代への訣別をもたらすであろうが（このような蓋然性についての詳しい検討は、拙稿「毛沢東体制は解体する」、『朝日ジャーナル』、一九七六年九月二十四日号参照）、国際社会のほうは、それより一足先に毛沢東以後の時代への始動を開始しはじめたのである。

日本外交は、この重要な時期に政局の混乱に陥っているが、だからといって新しい外交的着手を急ぎすぎてはならない。当面は、中国の行方を十分に見きわめることが重要な外交だといえよう。

北京の天安門広場で盛大におこなわれた毛沢東葬送の儀にしても、全世界でもっとも大きくその死を伝えたわが国ではあったが、ついに一人の日本人もそこに参加を許されなかったのである。中国にたいする対応の仕方に、かんしても、われわれは毛沢東時代への訣別を迫られているといえないだろうか。